

イタリアンライグラス「サクラワセ」の 現地実証成果①

鹿児島県における試作成績と今後の利用性

鹿児島県畜産試験場 黒江秀雄

はじめに

イタリアンライグラスは、鹿児島県内で約1万1,600 ha 栽培され、飼料作物の中で断然トップの地位を占めている。主要4草種の栽培面積の推移について図1に示したが、53年に比べ、いずれの草種も栽培面積が増加し、飼料作物に対する畜産農家の関心が高まりつつある。最近の動きでは、イタリアンライグラスとトウモロコシの栽培面積の拡大が顕著である。

さて、イタリアンライグラスは栽培が容易で、秋冬作の中でも最も多収の草種である。畑はもちろん、水田でも比較的安定した収量が得られる。利用面では、生草・サイレージ・乾草いずれでも利用可能で、DCPとTDN含量が高く、家畜の嗜好性も良い優れた草種である。

一方、春夏作の中で栽培面積が増えつつあるトウモロコシは、台風襲来の多い南九州では、4月に

播き8月上旬までに収穫するのが最も安全な栽培法である。4月播きのトウモロコシと組み合わせるには、イタリアンライグラスは極早生の品種を選ぶのが望ましい。

以下、トウモロコシや水稻の前作として栽培が期待されるイタリアンライグラス「サクラワセ」について、鹿児島県畜試、鹿児島県農試大隅支場、肝属郡吾平町の転換畑（早期水稻地帯）で検討した結果を紹介し、今後の栽培利用上の参考に供したい。

4月播きトウモロコシ、早期水稻の前作に最適

鹿児島県畜試の畑で検討した結果、表1に示すように、出穂はサクラワセが最も早く4月6日で、ヤマアオバやマンモスAとは約1カ月の違いがある。サクラワセはミナミワセより6日早生である。なお、刈取りはほぼ出穂期刈とした。

乾物収量は、表1に示すように、サクラワセが

表1 乾物収量(kg/10a) (1983・鹿児島畜試)

品 種	1番草(刈取日)	2番草(刈取日)	合 計	指 数
サクラワセ	807 (4/6)	300 (5/7)	1,107	109
ミナミワセ	793 (4/12)	222 (5/12)	1,015	100
ワセユタカ	897 (4/26)	314 (5/24)	1,211	119
ヤマアオバ	905 (5/7)	169 (6/6)	1,074	106
マンモスA	942 (5/7)	301 (6/6)	1,243	122

1982年10月23日播種

表2 1日当り乾物生産量(kg/10a/日) (1983・鹿児島畜試)

品 種	1 番 草	2 番 草	合 計	指 数
サクラワセ	4.89	9.68	5.65	112
ミナミワセ	4.64	7.40	5.05	100
ワセユタカ	4.85	11.21	5.69	113
ヤマアオバ	4.62	5.63	4.75	94
マンモスA	4.81	10.03	5.50	109

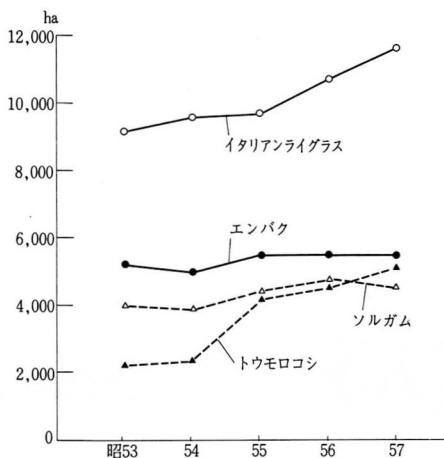


図1 鹿児島県における各飼料作物の栽培面積の推移

ミナミワセよりも多収で、特に再生収量が多いのが特徴である。マンモスAやワセユタカに比べると収量は劣る。

1日当り乾物生産量(表2)は、1番草ではサクラワセが最も多収である。2番草はワセユタカやマンモスAに劣るが、ミナミワセよりかなり多収である。1, 2番草の合計では、ワセユタカ並みの収量である。

鹿児島県農試大隅支場の畑での成績は表3, 表4のとおりである。刈取りは、1番草が年内刈(草丈60~70cm)で、2番草以降は出穂始から出穂期刈であった。出穂は、サクラワセが3月22日で最も早く、ミナミワセより10日早くなっている。

サクラワセの乾物収量(表3)は、ミナミワセより5%多収で、ワセアオバやワセユタカより低収で

表3 乾物収量(kg/10a) (1983, 鹿児島農試大隅支場)

品 種	1 番 草 (刈取日)	2 番 草 (刈取日)	3 番 草 (刈取日)	合 計	指 数
サクラワセ	328(12/16)	724(3/22)	345(4/20)	1,397	105
ミナミワセ	326(12/16)	732(4/1)	271(5/9)	1,329	100
ワセユタカ	377(12/16)	784(4/12)	479(5/18)	1,640	123
ワセアオバ	377(12/16)	894(4/12)	505(5/18)	1,776	134
ワセホープ	383(12/16)	847(4/20)	334(5/24)	1,564	118
ウエストラ	378(12/16)	824(4/20)	372(5/24)	1,574	118

1982年10月5日播種

表4 1日当り乾物生産量(kg/10a/日)
(1983, 鹿児島農試大隅支場)

品 種	1 番 草	2 番 草	3 番 草	合 計	指 数
サクラワセ	4.56	7.54	11.90	7.09	115
ミナミワセ	4.53	6.91	7.13	6.15	100
ワセユタカ	5.24	6.70	13.31	7.29	119
ワセアオバ	5.24	7.64	14.03	7.89	128
ワセホープ	5.32	6.78	9.82	6.77	110
ウエストラ	5.25	6.59	10.94	6.81	111



「サクラワセ」の生育状況(昭59.4)

あった。

1日当り乾物生産量(表4)は、ミナミワセに比べて15%多収であったが、ワセユタカやワセアオバに比べて低収であった。

鹿児島県畜試、吾平町早期水稲転換畑での成績は表5, 表6, 表7に示すとおりである。1番草は12月13日に刈り取った。2番草は、現地試験のため正確に出穂期刈りとすることはできなかったのので、出穂期~開花期の刈取りであった。

表5 乾物収量(kg/10a)
(1983, 鹿児島畜試 吾平町転換畑)

品 種	1番草(刈取日)	2番草(刈取日)	合 計	指 数
サクラワセ	182(12/13)	617(4/5)	799	103
ミナミワセ	194(12/13)	580(4/5)	774	100
ワセユタカ	227(12/13)	878(4/25)	1,105	143
ヤマアオバ	208(12/13)	1,011(5/13)	1,219	157
マンモスA	198(12/13)	914(5/13)	1,112	144

1982年10月14日播種

表6 1日当り乾物生産量(kg/10a/日)
(1983, 鹿児島畜試 吾平町転換畑)

品 種	1 番 草	2 番 草	合 計	指 数
サクラワセ	3.03	5.46	4.62	103
ミナミワセ	3.23	5.13	4.47	100
ワセユタカ	3.78	6.60	5.73	128
ヤマアオバ	3.47	6.70	5.78	129
マンモスA	3.30	6.05	5.27	118

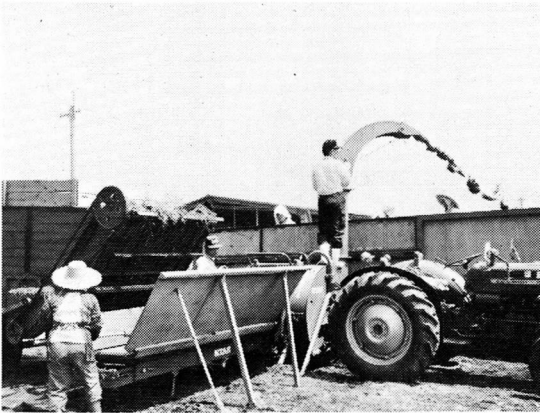
表7 イタリアンライグラスの圃場残根量(乾物・kg/10a)
(1983, 鹿児島畜試 吾平町転換畑)

品 種	残 根 量	指 数
サクラワセ	154	107
ミナミワセ	144	100
ワセユタカ	352	244
ヤマアオバ	488	339
マンモスA	470	326

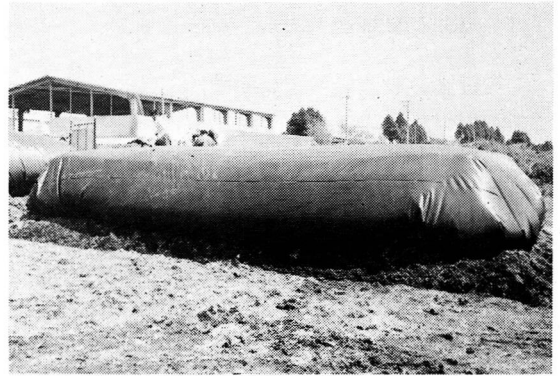
1983年5月13日調査



「サクラワセ」の収穫作業



「サクラワセ」のサイレージ調製



「サクラワセ」のスタックサイロ

乾物収量(表5)については、サクラワセはミナミワセと同程度の収量で、ワセユタカやヤマアオバ、マンモスAより劣った。

1日当り乾物生産量(表6)についても乾物収量と同様の傾向であった。

水田でのイタリアンライグラスの栽培の場合、特に残根量がイネの生育やロータリ耕に大きな影響を及ぼしている。表7に示したように、サクラワセやミナミワセは圃場残根量が少なく、ワセユタカの $\frac{1}{2}$ 以下、ヤマアオバやマンモスAの $\frac{1}{3}$ 以下であり、水田に導入しやすい品種といえる。

サクラワセの活用法

サクラワセはミナミワセより6~10日早生で、収量も同程度かそれ以上を示す。1日当り乾物生産量は、ミナミワセより多い。4月上旬までに出穂するので、4月播きのトウモロコシの前作として適した品種である。また、県内では約8,000haの早期水稲が栽培されているが、極早生であることと、残根量が少ないことから今後の栽培面積の拡大が期待される。また、草型としては、ワセユタカより茎が細く、予乾サイレージや乾草調製に適した品種といえる。

イタリアンライグラス「サクラワセ」の 現地実証成果②

岡山県における実証成果と普及性

岡山県農林部普及園芸課 専門技術主幹 山田林三郎

はじめに

乳牛の高泌乳時代を迎え、自給飼料も従来の量から質への転換を余儀なくされたことに伴い、トウモロコシのホールクロップサイレージが急速に普及してきた。雌穂重割合の高い高品質のトウモロコシを収穫しようと思えば、どうしても早播栽培が望まれるが、イタリアンライグラスとの輪作体系では、イタリアンライグラスのスプリングフ

ラッシュが4月下旬~5月上旬になるため、トウモロコシの播種期が遅れ、品質が低下するという悪循環を繰返していた矢先、イタリアンライグラスの超極早生品種「サクラワセ」が開発されたので、これを現地で実証し、その結果をとりまとめたので報告する。なお、この現地実証は昭和57年度に実施したものである。